

山岡莊八

徳川家康

龍虎の巻

卷之八

八世因山



徳川家康(11)

龍虎の巻



昭和32年8月10日 第1刷発行 辛 320
昭和39年12月20日 第37刷発行

著 者 やま おか そう ぼち
山 岡 荘 八

発 行 者 東京都文京区音羽町 3-19
野 間 省 一

印 刷 所 東京都文京区武島町22
慶昌堂印刷株式会社

発行所 東京都文京区 株式会社 講 談 社
音羽町3-19

落丁本・乱丁本はお取りかえいたします。(製本国宝社)
© Sohachi Yamaoka 1956

目

次

女 関 白	大 患	抵 抗	造 花 の 人 生	荒 波 の 城	政 略	霜 の 心	初 恋	誤 解 の 海
.....一七	一五	一六	一七	九	六	五	三	七

虚々実々	一九
出奔	二九
犠牲の風	四〇
山茶花	五五
地鳴りの春	六六
時勢の流れ	七四
三島の会见	八〇
人質婚嫁	八四
勝利者	九四

扉 絵	装 幀
木	杉
下	本
二	健
介	吉

徳川家康

龍虎の巻

誤解の海

一

富田左近と津田隼人が浜松へ着いたのは十二月の二日であつた。

兩人は途中で岡崎へ立寄り、石川数正と対談した上で、浜松へ着き、本多作左衛門の屋敷に入つたのだが、数正もまた兩人のあとを追いかけるようにして浜松城へやつて来た。

家康が使者を引見する前に会つて打合せの必要があつたからであつたが、この事はすぐ家中へあやしい噂の波を立てた。

こんどの於義丸の養子一件は、すべて数正の画策によるものだといふのである。

「——聞いたか。於義丸さまの人質一件を」

「——うむ。人質に出すいわれなしと、反対する

者が多いので、こんどは養子にと云つて来たそうじや」

「——いや、その事ではない。その使者はまずもつて岡崎へ立寄り、万事石川どのと打合せて来ているといふことだ」

「——それも聞いた。石川どの、いつたい徳川家の家臣なのか、それとも羽柴家の家臣なのか」

「——と、こゝで云い出すのは穩やかではない。しかし、羽柴筑前が、ひどく信用していることだけは確かじや。いつたいお館は何と仰せられるかう」

「——お断りなさるであらう。信康さま亡きあとに庶腹ながら於義丸さまが長子、家督のごご決定になつては居らぬが、当然第一に考えらるべきお方じや。それを人質で氣に入らずば養子にせよ……そんな口実でお遣わしなすることは万々あるまい」

「——それがしが申しているのは、その事ではな

い。もしお館さまが、お遣わしなさると仰せられた時……その時そのまゝ黙つていてよいものかどうかと云うことじや」

「——われ等はハッキリと反対するぞ」

「——われ等も反対じや。この前の例もあるからの。信康さまご切腹の通りのような」

「——ふーむ。あの時の、当方から信長公へのご使者は、大久保忠世どのと、酒井左衛門尉どのであつたが、何れも、今もつてお館のお心に一点のいこりを残しておわす模様じやからの」

「——とにかく一度、みなで石川どのに、こまかい事情の説明を求めてみるか」

「——といつて、あの石川どのが、素直にわれ等に、肚など打明けて語るご仁ではないのでなあ」

問題は秀吉の申出の氣に入らぬことにあるのだが、それがいつの間にか秀吉に信賴されているということで、石川数正にすり変えられているようであつた。

今日も、本丸の重臣だまりに集つた連中は、そのことだけを話題にして、ともすれば数正への疑念を匂わしてゆくのである。

そうした風評を、数正自身はむろん知らぬ筈はなかつた。しかし、岡崎から震まじりの雨をおかして駆けつけて来ると、数正は控えの間で着替えをすまして、そのまゝ重臣溜りには顔を出さず、家康の居間に通つていつた。

家康の居間には、八ツ半（午後三時）に使者を引見するため、本多正信と作左衛門重次とが詰めていて、数正が入つてゆくと、びたりと話を中止してこれを迎えた。

数正は、その場の空氣の冷たさを全身に感じながら、

「いやはや汗をかきました。やはり、ご引見の前に駆けつけようと存じて」

時刻は九ツ半（午後一時）になろうとしていた。

二

「これはご苦労さまでした」

数正が家康に一礼すると、本多正信がまつ先に口を開いた。

「だいたい使者のご意向は分りましたので、ご返事のことをあれこれと相談し、たゞいま決定したところでござります」

数正はすぐにはそれに応えなかつた。

一度しまつた手拭でもう一度襟もとを拭きながら、

「ひどい冷えゆえ、汗のあとがゾク／＼致しまする」

作左衛門にと、家康にともなく話しかけてから、

「どう決りましたので」

家康もまたそれには直接応えずに、

「岡崎へ寄つて来たそうじやの兩人は」

「はい。それゆえあたふたと駈けつけました。それがしが訊き出したところと、こゝでの事とが相違しては一大事と存じまして」

家康はこくりとうなずき、

「正信、決つたことを数正に云うて遣わせ」

「かしこまりました。とにかく、正月ももはや目の前に迫つて居りますことゆえ、こゝでは直答を避けまして、来春早々、当方よりご返事申上げる……として、今日はご酒宴の上引出物を差出し、一応このまゝ引取つて頂くことを決めましたところで」

数正はそれを聞くと、うなずく代りにはげしく首を振つていつた。

「それは拙い！」

「と、仰せられると、何か、特別お身さまの耳に入つたことでも……」

「耳へではない。心にひびいた事がある」

数正はびたりと正信の口を封じておいて、家康

に向き直つた。

「筑前がご気性は殿もよくご存知でござりましよう」

家康は相手の語氣が鋭かつたので、そつと脇を向いて、

「知つてはいるが、……しかし、直答は避けてもよからう」

「直答ではござりませぬ。人質を出せと云われた返事が、今日まで延引していた……その後でござりまする」

「ふーむ。で、こなたはどうせよと云うのじや」

「即刻ご承引の上、正月は大坂城で迎えさせられたがよいと存じまする」

「ふーむ」

と云つたが家康は、それなり黙つて可も不可も云わなかつた。

「数正……」

と、作左衛門が上半身を年寄りじみた曲げ方

で、

「四人だけだ。べつに言葉を飾る必要もない。殿はな、今ごろになつて、於義丸さまに父親の責任を感じて居られるらしいのじや」

「責任を……？」

「そうじや。今まで殿は、於義さまにも、その母親にも、親らしいことは何一つしておわさぬ。それゆえ不安になつて来たのじや。於義さまが大坂へ赴いて、秀吉に心から愛されたら、まことの親の冷さに気がついて、逆に実父を呪いだしはすまいかとなあ……そうでござりましょうが殿？　そこで、とにかく正月すぎまで、わしもこんなに可愛がつていたのじやと、お側において思い込ませたい……云わば、薄情さを取繕ろわねば手離せぬ、妙な親のぐちでなあ」

そう云うと、フフッと肩をゆすつて意地わるそうに笑つていつた。

三

家康は苦い顔になつて舌打した。

本多作左衛門の云うとおり、彼は、於義丸とその生母の、お万の方には、あれなりひどく冷淡であつた。

嫡子の信康が、しきりに父子の間を打解けさせようとしたのだが、作左衛門の手を経て中村家から取戻すところとは地鯉^{つり}鮒^ふの神官のもとに預けたりして、お愛の方の産んだ子ほどに愛そうとはしなかつた。

それだけに家中では妙な風聞が立つたことさえある。

家康はお万の方の貞操を疑っているのではあるまいかというのであつた。

そんなことは無論なかつた。

たゞ家康が案ずるのは、信康の場合と同じように、自分の手許で育てなかつたことへの危惧であ

つた。

(子供は生れよりも育ちによる……)

自分の手許を離れて育つた於義丸には、家康の心の通ぜぬところが出来ていて、それがまた信康のような、思いがけない失敗を招くことになるのではなからうかと……

ところがその於義丸を秀吉の許へ送らなければならなくなつたのだ……

そうなると、父としての責を果してないのが、急に大きな自責の種になつて来た。

作左はそれを知つていて抑^{おさ}抑^{おさ}うように笑うのである。

「殿のお心はな数正……」

作左は、いぜん皮肉な口調で、

「正月をこの城でさせさえすれば、於義さまが思いのまゝの人間になると思うてござる。おかしい話よ、なあ数正」

数正は静かに作左衛門に向き直つた。

「すると、作左どのは、われ等と同様、すぐに於義丸さまを、大坂へ遣わすがよいと云われるのじやな」

「ブルル、とんでもないこと!」

と、作左衛門は首を振つた。

「われ等は、この度のことには腹を立てている。人質が養子になつた位で賛成など出来る筋合いのものではない。まつ平ご免と、すぐにも使者を返して、一戦のご用意あるよう……と、これが、われ等の動かぬ立場じや」

そこまで云つて、作左衛門は又ニヤ／＼と笑いだした。

「われ等がいかに一戦を主張しても、殿が、それはいかん、秀吉には到底叶わぬ故、養子にやつて機嫌を取ろうと仰せらるれば、この爺にも、何とも致し方はない仕儀じやが……」

「分つた!」

と、数正は作左衛門をさえぎつた。

「おぬしは、いずれ、この数正を、腰抜けめと罵る氣であらう」

「さよう。この作左の眼の黒い間は、秀吉ずれに頭など下げてなるものか」

「殿!」数正はもう一度作左衛門に大きくうなずいてみせてから、

「この数正が、お願い致します。相手は一步折れてご養子にと云われたもの……この辺で、ご決断願わしゆう存じます」

「年を越しては悪いと申すのじやな」

「はい。それでは御家の損でござりまする」

「損……損のいわれは? わしには分らぬが」

家康がそう云うと、数正はすつと胸をそらして睨むように云いきつた。

「年を越しましては、家中の者の無念さが、半減すると、お氣づきなされませぬかッ」

四

「なに、家中の者の無念さが!」

家康がびつくりしたように訊き返すと、

「その通りにござりまする!」

数正は詰め寄るようにまた一膝すゝみ出た。

「こゝで於義丸さまを大坂へ送る事の効用の第一は、家中へ無念さをしみわたらせる……その事でござりまする」

「フーム」

「その無念さが、一層徳川家の団結を固める基とご判断なされませ。こゝでは相手の無理をそのまゝ通させた……無念でならぬと仰せられませ、さすれば作左なども笑いは致しますまい」

「これ数正……」

こんどは作左衛門があわてて、

「妙なところへ、わしの名を出すな」

「出してもよい!」

数正は弾きかえすように、

「こゝですぐさま於義丸さまをお遣わしなされた

とて、むろん秀吉の目的はそれだけでは達されては居りませぬ。於義丸さまの縁を云い立て、殿に大坂城へやつて来るよう、次の使者が参りましよう。相手の肚は、諸侯列座の大坂城内で、殿に頭を下げさせることにある……よつて、養子の儀でことをこじらせては、二度目の使者の口上がずつと強くなりましょう」

「数正」

家康は、わざと平静を装いながら、

「すると、養子の儀を、二つ返事できき入れおくと、大坂へは行かずに済む……断られると申すのか」

「仰せの通りにござりまする」

数正は、キラ／＼と双眼に焰をやどしてうなずいた。

「われ等に他意はない。それゆえ於義丸も二つ返事で遣わした。又、於義丸にも逢いたいのだが、何分家中の者が、人質をとられた上での呼出しじ

やと云うて納得せぬ。それゆえ今しばらく、逢いたい思いを押えて時期を見よう……と、ご返事なされば、秀吉とて、強つて来いとは云われますまい。これが、於義さま、年内お遣わしの、第二の効用にござりまする」

「なるほど！」

と、また作左衛門が口をはさんだ。

「数正は大した策師じや！ おぬし、その弁巧で、秀吉まで丸めて来たか」

「なに、秀吉を丸めたと……」

「怒るな。おぬしは徳川家の家臣か、羽柴が家臣かと、みなく噂をしておるわい」

「これは心外な……」

云いかけて、数正はすぐに止めた。

作左衛門とは、互いに肚を打ちあけて、双方それの立場で、家康のために殉じようと誓い合つた仲であつた。

（恐らく作左は、その誓いを家康にも感じさせま

いとしているのに違いない……）」

「殿！」と、三度び数正は、家康に向き直つた。

「ご決断下されませ。時刻が切迫して参りました」

家康はしつかりと火桶の中の火箸をつかんで眼をつむつている。

「これは、ちと、妙な云い方でござりまするが、秀吉は、於義丸さまのお顔を存じて居りましようかなあ」

本多正信が、黙つているのに耐えられぬと云つた調子でそつと云つた。

五

「なに、於義さまのお顔を知つているか……」

正信の言葉を作左衛門がききとがめた。

「かりに知らなんだら、どうしようと云うのだ正信は」

「全然知らぬものならば、かりに、身代りを立て